

## 「原初の情緒発達」(1945)

「小児医学から精神分析へ」第10章 北山修監訳(2005)岩崎学術出版社

## 1. 時代背景

1945年(W. 45歳) 1914~18: I 大戦 従軍船医、友人多数死亡

1941~45: II 大戦 疎開児童対応、クレアと出会う

クライン派から離れる時期・・・母性剥奪の問題に直面、環境の重要性を主張

## 2. 本論文の位置づけ

「クラインに対する最初の明確な挑戦」と言われている。

1941~44: 英国精神分析協会内大論争→クラインの論文発表の求めに応じず中間学派へ

1951: クレア・ブリトンと再婚→精神的安定、「抱えること」理論への影響大

1953: 分析協会会長職、ラジオ番組、非専門家向け講演、一般紙寄稿等の活動へ

「Wの全業績から唯一本論文を選ぶとすればこれか？」

- ・その後展開するW理論のエッセンスがすべて詰まっている。
- ・乳幼児の発達と精神病を結びつけようとの意図が現われている。当時革新的。
- ・クラインの影響下にあったWがクラインに挑戦、対話しようとするマニフェスト。

(以上、参考文献: 館直彦「ウィニコット入門」)

## 3. 論文概要

## ○前提: &lt;構え、テーマの重要性強調&gt;

- ・目的: 早期(生後5-6M)情緒発達が極めて需要→精神病病理学への鍵がある
- ・精神分析の発展: この20年(クライン業績)の重要性～患者の内なる組織への空想  
フロイト技法でより原初的要素に進みうる→抑うつ・心気症分析へ
- ・主張: 外的関係葛藤(神経症)患者=Thの仕事はPtへの愛、憎しみは事象へ偏る  
前抑うつの・抑うつの患者=併存的愛と憎しみをThが理解できることを要求  
分析の道筋=外的関係葛藤・抑圧の対処→迫害的要素起源を含む抑うつ防衛全般
- ・予備的記述: 6M乳児の変化=身体的技術発達(対象物を掴み口に入れる)+情緒的発達  
遊びの中で自分が内側を持っており、物事が外側からくると知る  
⇒母親の内側を仮定、その気分を思いやり始める⇒全体人格としての関係
- ・課題: この段階以前の乳幼児感情や人格の中で何が起きているかを調べる  
どれくらい早期に重要事態は起こるか～妊娠9M終盤に情緒発達の機が熟す

## ○早期の発達過程: 3つの過程

①統合(integration)、②私有化(personalization)、③現実化(realization)

\* 一次的無統合(primary unintegration) = 理論的出发点・退行的人格解体状態  
= 人格解体の基盤をもたらす、一時的統合に関する時間の遅れ・失敗、防衛の失敗要因  
例: 週末について詳しく述べ続けるPt. → ばらばらの断片を一人に知られたい二ードと解釈  
= 乳幼児の普通の事柄～断片部分を寄せ集めてくれる人物の有無⇒統合に影響

## \* 統合を助ける2組の経験

①乳児のケアの技術: 暖められ、あやされ、お風呂に入れられ、揺らされ、名づけられる

②激しい本能的経験: 内側から人格を寄せ集めようとするもの

人生最初の24hr = 統合に向かう健康な歩み ⇔ 貪欲な攻撃の早期抑制 → 過程遅延・逆戻り  
正常乳児 = まとまって何かを感じる ⇒ 断片か全体か、母の顔中か自身の体内かに無関心

## \* 環境

養育技術、見える顔、聞こえる音、匂い = 断片 ⇒ 徐々に寄せ集められ一つの「母親」存在

⇔ 無統合な精神病状態 = 個体の情緒発達の原初的段階では自然 = 精神病Pt.の転移状態で

⇔ 健康な状態 = 自身の体の中に生きている、統合されている、世界はリアルと感じられる

## \* 統合に重要なこと: 人格がその人の身体の中にいるという感覚の発達

= 私有化を築くもの: 本能的体験と、反復される静かな身体へのケアという体験

⇨離人化＝早期の私有化の遅れ (※子ども時代の想像上の仲間＝防衛)

### ○乖離

無統合→乖離(dissociation)が生じる

例: 静かな状態/寝床や入浴時の穏やかな感覚 vs 興奮状態/授乳不満、破壊衝動、泣き叫び

静かな経験を通して築き上げる母親 vs 破壊しようとする乳房の背後の力としての母親

眠っている子ども vs 目覚めている子ども

**\* 夢を思い出すのを助けてくれる人→乖離の解消へ/芸術的創造、個人・人類の幸福**  
乖離現象～都会生活、戦争と平和、夢遊病、失禁、斜視の一部等

### ○現実適応

#### **\* 外的現実への原初的關係**

赤ん坊: 切迫した本能的欲求、食肉的な考え

母親: 乳房/ミルクを作り出す力、空腹な赤ん坊に食いつかれない考え(寛大で理解ある人)

⇒互いに関係を持ち一緒に一つの経験を生きる⇒**重なり合う時・錯覚の瞬間**

＝自分の幻覚か、外的現実にも属するものか、どちらにもとることのできる経験的断片

(素材: 細部にわたる実際の視覚、感触、匂い→幻覚・考えを豊かにする)

⇒実際に手に入るものと呼び出す能力を築き始める

実母・一人の養母の仕事→複雑なことから幼児を守り、世界の断片を着実に供給し続ける

→客観性、科学的態度を築き上げる⇨この段階での失敗→客観性における失敗

#### **\* 重要な点: 空想の中では物事が魔術によって動く**

空想＝ブレーキがない愛と憎しみの効果⇨現実＝ブレーキあり/検討され、知られる

⇒客観的現実が充分尊重された時以外、楽しむことはできない

現実よりも原初的なもの＝外的現実の欲求不満を扱うために創出したものではない

最も原初的な状態＝病の中に維持、退行の可能性⇒対象は魔術的な法則に従って動く

初めに外的共有された現実との単純な接触要⇒**乳児の幻覚＋世界の提示＝錯覚の瞬間**

⇒錯覚を生み出すようなニードに合うよう、世界(母親)が提示し続けられるべき

### ○原初的無慈悲さ(思いやり以前の段階)

赤ん坊と母親の間の最早期の関係＝無慈悲な対象関係(乖離状態)＝思いやり以前

正常な子: 母親との無慈悲な関係を楽しみ、それを遊びの中で示す←容認する母が必要

この遊びがない→無慈悲な自己を隠し、乖離状態でしか生かせなくなる

#### **\* 一次的無統合の純然たる受容 vs 人格解体への恐怖**

自己断片の行為: 衝動の結果、かみつく口、刺すような目、耳をつんざく声、吸い込む喉、、、  
思いやりの段階ではそれらを忘れ得ず

解体＝衝動の放棄＝自分勝手に動き回る、制御されない→自身に向けられた衝動との考え

### ○原初的報復

一層原初的な対象関係: 対象が報復という形で行動する＝外的現実への真の關係に先行する

そこでは、対象・関係<自己の一部>それらを魔術的に呼び出す本能(※ユングの元型)

原初的な性質を持つ内向化～この環境内に生きる人生→外的現実から豊かにされず貧しい

#### **\* 指しゃぶり**

誕生以来観察可＝正常活動と情緒障害症例双方に重要

「自体愛」～快樂を楽しみ、享樂的觀念をもつ→強く継続的→傷つける＝憎しみも表現

指しゃぶり・爪かみ～愛と憎しみが内側へ曲げられる＝関心ある外的対象確保のニード

外的対象への愛に関する欲求不満に直面⇒自己へ向き変わる愛と憎しみ

慰めの機能＝乳房・母親等の代わり、正常で普遍的(おしゃぶり、正常成人の活動)

スキツォイド・パーソナリティに存続、強迫的になる(例: 本を読まずにいられない)

意義: 対象を一定の場所に限定しようとする、内と外の間の中に確保する試み

⇒外的世界における対象喪失に対する防衛か、身体の内側の対象制御喪失への防衛

正常な指しゃぶりに同様な機能～安全でない感覚と原初的不安に対する防衛  
すべての指しゃぶり⇒原初的対象関係の有効な劇化へ欲望から作り出され、幻覚される  
始まりにおいて外的現実からの協力とは無関係  
(乳房と指を同時にしゃぶる～外的現実を使用しながら自己創造された現実にしがみつく)

○要約

**\*原初的な情緒的過程を公式化する試み**

= 早期の幼児期において正常、精神病においては退行の形で現れる

**4. 考察、疑問、検討課題**

- Klein 理論 + 乳幼児母子観察の緻密さ → 早期情緒発達過程、乳幼児主観世界生成の輪郭へ
- 指しゃぶりが胎内でも観察、乳児の睡眠中の口唇反応 → 外的現実在先立つ自体愛  
→ 胎内環境/外的環境(対象)との葛藤、幻覚、衝動、反応(お腹を蹴る等)は出生以前  
⇒ 攻撃性: 「死の本能」vs 「環境の失敗」は、胎内生成過程による現象を異なる表現で捉えたものと言えないか? (クラシックを聴かせると胎児が寛ぐ、妊婦の状態がホルモンに影響)
- W がこの時期 K に反論し始めた背景～クレアの抱えを得てケアラーを脱却?